ヨーゼフ・ボイス・ゼミナール
第２日「芸術としての教育」後半

［質問］
針生：アカデミーのボイスの部屋は、もぐりや落第生も全部収容したんで、ある本によると 300 人ぐらい集まったというんですが、あそこに 300 人入るのかなというのが１つ。シュトュットゲンさんはずっとその場に立ち会ってたわけだから、最高で何人ぐらい入ったのかと。

シュトュットゲン：まず私が芸術アカデミーに入った時には、芸術アカデミー全体で 600 人学生がいました。1 クラスの平均で言いますと 15 人ということになります。しかしながらボイスが解雇される直前、その時に最高の人数に達していたわけですけれども、その当時はクラスに 450 人いました。

われわれが一番最初にしたことは、クラスの部屋の中に収まり切らなかったわけですから、当然のことながら廊下を使うという措置に出ました。ただその後はですね、できる限りみんなで小さな部屋に何とか入って、ぎちぎちの状態でやっていたわけです。それから考えて、なんとかアカデミー全体をもう少し大きくできないかということにだんだん焦点が定まりました。

国家、国の意向でアカデミーに学びたい者を外に放り出す、要するに受け入れないということをわれわれはできなかったわけです。

精神生活というものは、本来最高に重要なものなんですが、残念ながらわれわれの今の社会では一番下のランク付けになってしまっております。

その裏にあったのは政治的な理念です。その理念をボイスは、問題として目に見える形でみんなの前に提示したかったわけです。

要するに、われわれは精神生活の危機に瀕していたというふうに申し上げられます。特権を持った一部の人たちだけが十分な空間を与えられていて、そうでない人たちが外に放り出される、そういった状態です。

そして私がボイスのところに行って、ボイスの下で学んだのは、先ほど述べました概念をその場だけに留めておくのではなく、それからさらに発展させなければいけないということです。

つまり、拡大された芸術概念ということです。

針生：もう１ついいですか。アカデミーの同僚たちから非常に政治的な活動が過ぎるという声があって、直接民主主義のための人民投票の前でしょうか後でしょうか、ドイツ学生党をフルクサス・ゾーンウェストというふうに改称します。で、フルクサスという国際ハプニング運動へのボイスの共感は分かりますけれども、ずいぶん軽い名前を付けたというか、そういうような感じがするんですが、それは政治的な色彩を薄めようと思ってそういう名前にしたんでしょうか。

シュトュットゲン：政治的な色彩を薄めるという方向であったというふうには言えないと思います。そうではなくて、ボイスが常に言っていたことなんですけれども、私は別に政治を欲しているんじゃないと、政治を芸術としたいんだと。その関連で捉えていただいた方が正確なんじゃないかと思います。

ですから政治というものは、より高い次元の何かを作り出す、形を作り出すという自由へ向けて、克服されていかなければならない、そういうふうに考えたわけです。

参加者：先ほどテーマ、自由のところで、経済について少しお話になったと思うんですけれども、その時、ボイスとか学生たちは当時、もしくはその後、現在のものに代わる新しい経済のモデルというものを何か提示したんでしょうか、提示することができたんでしょうか。あと、それに関係しまして、ボイスは例えば、具体的な質問になるかもしれませんけど､彼の Künstlerhonorar というものに対してどういう態度を取っていたんでしょうか。

シュトュットゲン：新しい経済モデルをボイス並びに学生が提示することができたかどうかという点につきましては、申し訳ありませんが明日を待っていただきたいのです。明日、社会彫刻との関連で話をします。第２の点、芸術家の収入、芸術家がどのように経済的に報われるかという点につきましては、これはまともに答えるためには明日の経済の話を前提としませんと、全体像が分かりませんと、ちょっと分かりにくいと思いますので、これはまず経済の話を終わらせてからにしたいと思います。すなわち収入ということ、それから分業ということにそれは大きく関わっております。その中でも芸術家がどういう収入を得るかというのは、これはあくまでもプライベートな領域に属することでありまして、経済の大きなマクロ的なところからちょっと離れます。これに関しましてはまた経済の話が終わってから、明日詳しく話そうと思います。

この収入の問題を扱うにあたりましては、前もって権利の問題ということを問題にしなけ

ればならないと思います。この権利の問題を取り上げるということはですね、どれだけの仕事を成したかという、成し得た仕事との関わりではなくて、いったい人間はどういう権利を持つのかという、そこのところに関わってくるのです。そして、ただそのときに気を付けなければいけないのは、どの部門で働いているのかということが問題になります。消費的な部門で働いているのか、いわば生産的な製造的な部門で働いているのか、それによって話はまた変わってくるということです。

それで、この問題というのは当然ながら先ほどの一つの臨界点、臨界線、あそこから先の問題として立ち上がってまいります。

申し上げておかなければいけないのですけれども、私どもこのゼミナールにおきましては、残念ながらほんとに時間が限られております。この１つひとつの問題をすっかり検討するためには、おそらく１年まるまる必要になるんじゃないかと私は思っております。

まさにそれが自由国際大学の理念ではないかと私は思っております。

参加者：ボイスは男女の性差をどう考えていたんですか。

シュトュットゲン：まず第一に申し上げられるのは完全な平等ということです。その平等性によってその違いが実り多い成果を生み出せるからです。

しかしながらこれは非常に大きい問題ですので、もっともっとお話できることはあります。

ヨーゼフ・ボイスはもちろんたくさんの女性をクラスに受け入れました。

質問なさったことの意味をもう少し詳しく話していただけますか。

参加者：その平等に扱っているということはよく分かるんですけれども、何かそこに多少違いみたいなものが出てくると思うんですよ。芸術をやっていくと男性だからできることだとか、女性だからできることというのがちょっと出てくると思うんです。それについて伺いたいんですけれど。

シュトュットゲン：これは先ほどの研究の分野というところに関係してくるんですけれども、実際にある男女の違いというものは、当然ながらその仕事に反映してまいります。

そしてボイスが確信しておりましたのは、女性的なるもの、女性の仕事というものは、こ

れからますます重要性を増していくに違いないというふうに考えておりました。

ただしさらに区別を付けて違いをはっきりとしておかなければいけないのは、女だから女であるということではなくて、男性の中の女性的なるもの、女性の中の男性的なるもの、こういったものも区別をしっかり付けておく必要があるのではないかと思います。

この違い、今申し上げたような違いというものは、将来におきましてはよりいっそう重要になり、また決定的なものになると思います。平等ということから出発して、この違いというものは自由の中に立ち現れてくるような、そういった機会というものをどういうふうにつくっていくか、これが問題なわけです。

つまり、男性と女性の違いというものは、これまでの伝統であるとか、権力構造であるとか、そういったものによって決められるのではなくて、自由の中で、その違いというものが自由に現れてくる、このこと自身が必要なんだと、そういうふうに考えております。

参加者：ボイスが来日した時、何か政治目的もあったんでしょうか。

シュトュットゲン：ボイスが来ましたのは、1984 年だと思いますけれど、ボイスがこの日本におきまして、刺激、インパルスを与えたかったのは何よりも社会彫刻という概念でありまして、社会彫刻については明日扱うことにします。私はその場に居合わせなかったので、いったい個々にボイスが何を話したのかということは、残念ながら承知しておりません。

これをもうちょっと詳しく申し上げますと、異国にやってくるということは、やはり非常に大変なことでありまして、異国にやってきて私は先生だと、そして私はある種の福音を伝えに来たんだと。そういう言い方は、もちろん簡単にはできないわけです。異国にやってくるときにはまず学ぶ者としてやってまいります。これはまず芸術家の辿る過程と言うことができるんじゃないかと思いますけど、まず学ぶ者としての性格というものが強く出ざるを得ません。簡単に私は何か素晴らしいことをやった、教師である、お前たちのところに何か伝えに来たんだ、そういう態度は取れないわけです。ただ言えることは、この間に世界中で、世界各地で抱えている問題というのは、非常にお互いに共通してきて似ているんだろうということです。ドイツで問題になっているということ、これはおそらく日本でも問題になっている問題ではないかと思います。その意味で世界はますます共通化する部分を強めているんじゃないかと、私はそういうふうに考えております。

その際に中心課題、20 世紀も終わろうとしているこの現代において中心課題になっており

ますのは、私どもはどうやったら資本主義というものを克服できるのかということです。この経済体制、資本主義というものは確かに自由というものを根底においているはずです。しかしながら、自由を実現してはおりません。これをどうやって克服していくか、これがわれわれが現代に抱えている最大の中心課題ではないかと、私は思います。

私どもは結局、現在２つの根本的な課題というものを抱えているんだろうと思います。まず第一に、私どもは思考のための、考えるためのオルターナティブ、別な回路というものを築くということができるかどうかということです。確かに東西の壁はなくなりました。しかしその後はっきりしたことは、国家中心的な物の考え方ではこれ以上進むことはできないだろうと。国が何かの中心になっているというような状態、これで進むことはできない。そういたしますと、われわれとしては理念としていったいどういうものを築き得るか、まず理念の問題として、新しい理念をつくることができるかどうかということが問題になります。ちょっと余計な通訳のコメントをさしていただきますと、先ほどのドイツ学生党のときも新しい理念をつくれるかどうかというところで失敗したわけですね、それと関係ある発言だと思います。
２番目の重要課題といたしましては、そのような理念というものがもしつくられた場合に、あるいは理念をつくるためにもありますが、そのような手段というもの、道具というものをどうやって作り出すのか、それをどうやって実現できるかということです。すなわち、理念をつくるということと、それからそれを実現する手段、理念を実現する、理念をつくり出すことを実現する、その２つの平行現象ということ、それが非常に大事なことでありまして、今日はほとんどこの平行現象ということについてお話いたしました。結局そのようなことを手中におきまして、いかにコミュニケーションを図り、Idee を、理念を一緒に見つけていくかということ、そして見つけた理念というものを民主主義的に、暴力でなく、暴力は使わないで実現していくということ、これがまさに芸術に課せられた課題ではないかというふうに考えるわけです。

そして何よりも最重要の課題というのは、自由の問題です。自由ということが前提となって初めて人間とは何であるのかということを問うことができます。そしてその中で初めて人間は、本当に精神の中で自分を築いていこうとしたいのか、あるいはそうではないのかということが問われると思います。そこから人間に新しい光が当たってまいります、人間という存在に。ただし、それはただ人間にだけ新しい光が当たるのではなくて、実はこれがずっと拡がって、動物でもあり、植物でもあり、こういったものすべてに拡がっていくような、そういった新しい光が当たるはずです。結局この問題はエコロジーの問題になっていきます。すなわち、この精神的なところから出てくるものは、実は非常に包括的なものでありまして、いったいこれをどうしていくかというのは、最重要の問題です。私ども一人ひとりが、その道というものをこれから見つけていくように努力していかなければい

けないわけです。

この政治という概念はですね、先ほどの言葉を使うことになりますが、政治という概念はきわめて硬直化したものです。先ほど申し上げましたように、木のように硬直化しております。この木のように硬直化しているのではなくて、脂肪でもって柔らかくしようじゃないかと、そういうことです。

あと一つだけ質問を。

参加者：ボイスが彫刻という、Plastik という概念にかなりこだわっているということが今日分かったんですけれども、その彫刻という言葉を造形、Gestaltung という言葉に置き換えてもいいのか、お聞きしたいと思います。

シュトュットゲン：はい。

ではまた明日。